

ダニエル・ヤーギン、ジョセフ・スタニスロー著「市場対国家(上)」

日経ビジネス文庫、日本経済新聞社 2001年11月1日刊を読む

民営化とは

1. 国有企業は、当初のビジョンがどうであれ、実際には雇用の面でも、きわめて非効率的で、柔軟性を欠き、実績が低迷していた。
2. 必要な水準をはるかに超える人員を維持し、さらに雇用を増やすよう政治的な圧力を受けていたからである。
3. また、労働組合からの賃上げ要求に抵抗できず、このために、インフレをもたらす大きな要因になった。
4. 事業の効率が低く、労働組合の圧力に弱く、市場での競争から守られているので、巨額の損失を積み上げるようになり、納税者にツケをまわすようになった。
5. ローソン元蔵相によるなら、「公的資金という名の無限の財布をあてにする」ようになった。
6. 賃上げであれ、工場立地、大型プロジェクト、機器などへの投資であれ、どのような決定でも、企業自体の利害に基づくものではなく、そのときに政権の座にある政治家の意向による政治的な決定になる危険があった。
7. 国有企業に欠けていたのは、産業国有化を主張する労働党の政治家がもっとも嫌っていたもの、すなわち、市場によってもたらされる規律である。
8. 1982年、ローソン・エネルギー相がこう語っている。「企業の公的所有がもたらしたものは、買収の脅威を取り除き、最終的には倒産しかねないという脅威を取り除き、民間企業なら時に応じて行なわざるをえない市場からの資金調達を必要をなくすことである」。
9. さらに、イギリス型の公的所有では、製品が市場に適合したものにならず、消費者や買い手のニーズや希望はほとんど考慮されなかった。

【コメント】

なぜ民営化が必要か、国有企業の実態がよく述べられている。

- 2010年1月22日 林明夫記 -